

原爆文学研究会報

第三二一號

原爆文学研究会 二〇一〇年一月

白地図 はばかりながら、個人的な体験を一つ。去る一〇月二日、広島大会の懇親会で発表者の一人として簡単なスピーチをした折、大田洋子「山上」(一九五三)に描かれた、米兵にへつらい笑いを向ける子どもたちの姿が、かつて父の転勤で沖縄に住んでいたとき、同級生から教えられるまま、町で見かける米兵に「エクスキューズ・ミー」と笑いかけてピースサインを送っていた自分の姿と重なる、という話をした。私の中でそれとセットになっていた体験がある。

一九八四年、沖縄県浦添市にある港川小学校の三年生だった私は、社会科の時間に地図記号について教わった。教室で一通り学んだあと、今度は実地学習ということで、私たちは段ボールに町の地図を貼り、ビニール紐を通したものを画板のように首から提げて、担任N先生を先頭にしてぞろぞろと校門を出た。ここが交番、ここが郵便局、という具合に現地と地図を照らし合わせてペンで地図記号にするしをつけ、自分たちが歩いた道に線を引いていく。とてもくたびれた憶えがあるから、ちよつとした距離を歩いたのかもしれない。幼稚園があり、公園があり、商店があり、医院があり、団地があり……とにかく自分が住んでいる町は、横から見ても上から見てもごちゃごちゃしているなと思った。

しばらくして、車がたくさん走っている道路に出た。地図を見ると「国道58号線」とある。そして、車の往来の向こう、道路の向かい側には高いフェンスが果てしなくそびえ、その向こうには美しい芝生と建物の群れが、やはり果てしなく広がっているのが見えた。

地図を見ると、その一帯は真っ白で「米軍基地」とだけ書いてある。突然、その白さと雑然とした町の差に私は打たれた。そして、なんだこれは、という思いが胸に迫った。

さらに左にあった「東シナ海」の文字を、どうして西にあるのに東なのかと不思議に眺めていた頃の話である。でも、どういうわけか、あの地図のことが今でも忘れられない。(中野和典)

二〇一〇年度日本社会文学会秋季大会・

第三二一回 原爆文学研究会報告

二〇一〇年一〇月二・三日、広島大学東広島キャンパスで二〇一〇年度日本社会文学会秋季大会・第三二一回研究会を開催しました。

本研究会からは、野坂昭雄氏(コメント)・山本昭宏氏(研究発表)・高野吾朗氏(コメント)・中野和典氏(研究発表)・柳瀬善治氏(シンポジウム・報告)・加納実紀代氏(シンポジウム・コメント)が登壇しましたが、会報では前例に倣って研究発表者二名の発表要旨を掲載いたします。



◇ 研究発表1

主体のゆらぎ

——大田洋子「山上」を中心に

中野 和典

一九四七年冬、大田洋子は当時未発表だった「屍の街」（中央公論社（削除版）一九四八・一一、冬芽書房（完全版）一九五〇・五）について占領軍から取り調べを受けた。そのときの体験を題材にした小説「山上」（「群像」一九五三・五）に対しては、占領期に「原爆文学」が受けていた圧力を描き出した「メタ検閲小説」としての評価が小田切秀雄論（一九五五・七）以降定着している。このような評価は「屍の街」を主、「山上」を従とする配置を前提として成立しているが、「屍の街」が大田洋子の原爆体験にもとづいて被爆直後に書かれたものであるという記録としての一次性を持つことや、職業作家の作品として中央の出版社から刊行された最早期の原爆表象の一つであるという「原爆文学の祖」としての重要性を持つことを考えれば、「屍の街」と「山上」を主従の配置でとらえることには一定の妥当性が認められる。

しかし、その配置ゆえに見落とされてしまっている問題もある。例えば、なぜ「私」は「死の街」を（アメリカへプレゼントします）と憤る一方で、米兵へ笑顔や陶器を過剰に贈るという一貫性のない行動を取ってしまうのか、また、なぜ「山上」には「私」と米兵の対面だけでなく、それから二年後の出来事として「私」と米国人記者の対面までもが描かれているのか。これらの問題を追究すること

によって、「屍の街」に従属する小説としての価値ではなく、「山上」独自の価値を浮かび上がらせることができるはずである。発表では「屍の街」を主、「山上」を従とする従来の配置を、あえて「山上」を主、「屍の街」を従と反転させることで見えてくる問題を追究した。具体的には、まず「私」から米兵への笑顔の贈呈の問題に注目した。「私」の笑顔は自分でもその原因を特定できない曖昧なものであること、曖昧でありながらもやはり（へつらい笑い）には違いないこと、ただし、その阿諛の笑いが完全に否定されるべきものではなく、〈美しき〉を持つ可能性があることについて論じた。

次に、「私」から米兵への陶器の贈呈の問題に注目した。望まれてもいない陶器を米兵に押しつけるように手渡すのは、明らかに過剰な贈呈であること、その贈呈は「私」だけでなく下宿先の「戦争寡婦」までを傷つける行為であったこと、それほどの犠牲を払いつつ行われた陶器の贈呈が、米兵に「死の街」（「屍の街」を暗示する小説）の受け取りを拒まれたことによって引き起こされた代替行為であったことについて論じた。

さらに、米国人記者との対面における阿諛の逆転の問題に注目した。この対面では米国人記者が笑顔や握手を差し出し、「私」がそれを拒むという描写が反復されていること、その握手の拒否が、広島原爆の話聞くために「私」を呼んでおきながら、それについて質問しないという米国人記者の矛盾した行動を招いたこと、米国人記者の阿諛が原爆投下に対する米国人の責任を問われまいとする心性に根ざすものであることについて論じた。

最後に、阿諛と告発の間にゆれる「私」の主体の問題に注目し、「私」の阿諛と米国人記者の阿諛が、日米の原爆観がすれ違い続ける構造に深く関わっていることについて論じた。

◇ 研究発表2

小説カルポルタージユか

——核時代の表象と大江健三郎

山本 昭宏

報告では、一九六〇年代前半の大江健三郎のテクストを通時的に分析することで、大江のテクスト内で核時代の表象が繰り返される過程を明らかにし、〈恥の感覚〉に着目した。テクスト群の発表時期に即しての議論は、大江の被爆者認識の生成を跡づけることになる作業でもあった。

以下、繰り返される被爆者表象と、〈恥の感覚〉に絞って報告内容を振りかえることで要旨としたい。

繰り返される被爆者表象については、「ABC」、「原爆訴訟」、「肉体労働する被爆者」と〈恥の感覚〉の四点を取り上げた。これらのモチーフは小説とルポルタージユを横断して再演されており、大江の関心の所在を如実に示している。また、〈恥の感覚〉に関しては、素材論に留まらない問題を有しているものとして、特に時間を割き、「アトミック・エイジの守護神」(『群像』一九六四年一月号)、『個人的な体験』(新潮社、一九六四年八月)、『ヒロシマ・ノート』(岩波書店、一九六五年六月)を扱った。

まず「アトミック・エイジの守護神」の結末部において、みごとに肉体をもつ被爆孤児を前に赤面する主人公の描写に注目した。被爆孤児たちは「内部の不安」を隠すためにボディビルに熱中したわけだが、獲得した筋肉そのものが彼らの意図とは裏腹に「内部の不

安」を赤裸々に明かしてしまう、そのことに主人公は赤面したのであった。

この〈恥の感覚〉は、『個人的な体験』において、頭部に異常を持つて生まれた子の存在を死んだと偽って隠す場面においても表れる。その場面で、「鳥は頭がふたつあるように見える自分の赤んぼうと、いつかみた放射能障害による異常児の症例の写真とを比較してみようとした。」(『個人的な体験』『大江健三郎小説2』新潮社、一九九九年三二七頁)とあるように、被爆の悲惨が想起されていることは重要である。

小説作品だけではない、ルポルタージユの重要な局面でも〈恥の感覚〉は不意に到来する。「この原爆体験の被害者たちが、みずから感じている恥ずかしさというものを、僕らは、それこそみずからを恥じることなしに、どう受け止めることができるだろう? (『人間の威厳について』『世界』一九六四年二月号 一八九頁 『ヒロシマ・ノート』岩波書店、一九六五年 九九頁)。ここで表明される恥を、被爆者を前にして自らの無力を恥じたのだということも可能であるが、それよりはむしろ、〈恥の感覚〉を通路にして被爆者との接続を図るという極めて作家的なアプローチであったと解釈したい。そのとき、先に挙げた二作品における〈恥の感覚〉は有効な例証となるはずである。

しかし、被爆者表象にまつわる〈恥の感覚〉を、小説とルポルタージユの境界を無効化するものとして提示しようという当初の問題意識は、発表者の準備不足のため十分に深められることがなかった。これは反省点であると同時に、論文化にむけての課題であり、現在試行錯誤を続けているところである。

彙報

二〇一〇年度日本社会文学会秋季大会・第三二回原爆文学研究会

○大会テーマ「原爆体験と表象／文学——過去からの呼びかけ、未来への語りなおし——」

○日程 二〇一〇年一〇月二・三日（土・日）

○会場 広島大学東広島キャンパス学士会館二階レセプションホール

一〇月二日 一二時四〇分より

○研究発表

〔*コメント〕

「女性と沈黙——林京子を中心に」 姜 東星〔*野坂 昭雄〕

「小説カルポルタージュか——核時代の表象と大江健三郎——」

山本 昭宏〔*島村 輝〕

「核時代における人間の崩壊と歴史の再生——堀田善衛『審判』試論」

矢崎 彰〔*高野 吾朗〕

「主体のゆらぎ——大田洋子「山上」を中心に」

中野 和典〔*山口 直孝〕

○講演「肯定形としての〈原爆〉——占領期のいくつかの言説——」

河西 英通

一〇月三日 九時一〇分より

○シンポジウム「原爆表象／文学と政治的リアリズム」

・基調報告

「誰が「広島」を詠みうるか？」

松澤 俊二

「見なかつた者が描く絵画——非目撃者による原爆の視覚的表象」

加治屋 健司

「知的概観的な時代」の「表現行為」について

——三島由紀夫を視座として「加害」と「被害」を考える——

柳瀬 善治

〔司会 深津 謙一郎・水川 敬章／コメント 岩崎 稔・加納 実紀代〕

編集後記 広島大会の開会挨拶で長野秀樹氏（本研究会世話人）より

「この大会は、内側に閉じこもりがちである私たちの研究会にとつて、より開かれた場で「原爆文学」について議論をする貴重な機会です」という旨のご発言がありました。まったくそのお言葉通りの学会／研究会になったと思います。「学会／研究会」という記述に表れている通り、広島大会は日本社会文学会という大規模な学会と、会員約五〇名の本研究会とが合同で開いたものでしたが、規模や活動形態が異なる二つの会が合同で大会を開くまでには、実にいろいろな調整が必要でした。会の企画・運営に携わった全ての方々により労いの言葉を申し上げます。特に、二つの会の間で、中心的に準備を進められた川口隆行氏と深津謙一郎氏には御礼を申し上げます。お二人の働きなくして、この機会は得られませんでした。

機関誌「原爆文学研究」第9号（本年一二月発行）には、大会での研究発表の一部に加え、特集を組んでシンポジウムの成果を掲載する予定です。目下、編集作業進行中。ご期待下さい。（中野和典）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一九一〇三九五 福岡市西区元岡七四四

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-802-5631 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>